

ちんとやることだ。賃金・労働条件の経済闘争もよう闘わんで、政権なんていっても大衆は信用しないだろう。基本構想の路線でいけば、反戦・平和の闘いもできなくなる。安保・自衛隊を推進することになってしまふ。総評はいろいろ問題があつても平和運動の方針を出している。総評は少々削られたつて闘う旗を守る。反戦・反安保・反合・職場闘争はやっぱり総評しかできないのだから、そういう方針を堅持していかなばならない。総評の主体制と戦闘性をどう守るか、資本の側は官民分断をねらつており、へたすると労働統一で総評は八つ裂きにされる。

もともと労働統一は幹部の話し合いだけで実現できるものではない。共同行動を積み重ね、大衆の信頼感を強めるということだ。そうならないから、労働統一の話しがでたことよって逆に、単産内で組織問題が起きている。これでは本物の労働統一ではない。幹部だけがカン首を並べて首相と会つたといった対応ではダメだ。大衆次元の行動を強めていくことから出発することだ。

僕らは人間の数は少ないけれど

も、頑張っていけば、そう簡単に総評がどうかするということはないと思ふ。まあ力は足りない

特集—労働運動の現在と未来

運動の立て直しをあ

くまで追求

(建設一般・全日自労委員長)

中西 五州

多い戦争の犠牲者

最初に建設一般・全日自労の労働者はどういう仕事をしているのかをお聞きしたい。

一昨年、建設一般・全日自労と改称した。組織の大部分は失対労働者だ。政府は一九六三年から失対事業を打ち切る政策を強引にすすめてきた。一八年間この攻撃のもとで闘っている。一九七一年からは失対事業に新しい失業者をいれないということに私達を苦しめ

が、労働運動の歴史に汚点を残してはいけない。いま一番大事なときだから、この際スジを通して、

からせようとしている。私達は自然消滅させるわけにいかないから、建設の組織化にとりくんできた。設計、測量、ダンプの運転手、ピルの清掃・管理、ゼネコン、季節労働者を組織している。季節労働者は北海道で一人一人組織している。一〇ぐらいの職種の労働者の組織をすすめている。

合理化というより戦争の犠牲者だ。だから平均年齢は六五・六歳になる。失対事業は一九四九年から本格的に実施されたが、殆ど戦争犠牲者だった。一九六〇年代になつて中小企業の倒産や首を切られた人達が入ってきた。また不安定労働者が、失対事業の方が安定しているから入ってくるという形で、一時は二二万人の組織となり、総評で三番目ぐらいの組織だった。

失対事業を打ち切る政府の攻撃の本質はどこにあるのでしょうか。



あいまいな態度をとらないようにしていくことが大事だと思ふ。

か。

失対事業は必要なのだ。五〇一六〇歳で企業を追われたとか、商売がうまくいかなかった人達は非常に再就職が困難だ。企業はそういう人達に目もくれないし、零細企業に低賃金・無権利で働くしかない。あるいは能力・体力があるのに生活保護をうけていくか、やはり失対事業は必要だ。しかし政府がこれをつぶそうというのは、事業ができれば労働組合ができる、雇用保険なら労働組合はできない、生活保護でもできない。事業をつくれば当然賃上げ要求が出て聞いがおきることは必然だ。だから事業をつぶして不安定労働者においておこうとしているのだ。政府は、これらの労働者を民間活力で生かすというが、民間ではこういう労働者をいれてくれない。不安定労働者を切り捨てるといのが本質だと思う。

て、失対事業を町のために役立てる。市民の要求にそって仕事を一生懸命にやる、そして失対事業がこんなに役立っていることを理解してもらって、失対事業の必要性を認めてもらうように努力した。失対労働者には母子家庭の婦人が多い。子供をかかえて何べんも死ぬのうと思った人が、失対労働のおかげで、つましい中でどうやら子供を育て上げた人がいる。そういう中で労働運動にふれて自覚を高めた人が多い。

強い幹部と組合員の一体感

一般的には高齢化すると保守化するといわれるが、こういう人達は生活実感に支えられて、しっかりした政治意識をもっているわけですね。

政治意識は高い。やはり組合運動の中心になってきた活動家に共産党員が多いから共産党支持が強くなる。レッドパージでやられた人が自労運動の中心になってきた。活動家・幹部は低い給料で苦しい生活の中で闘っている。大抵はもっとめくまれた職場にいく。よほど献身がないと続かない。

——そこに全日自労の団結の基

礎があるということでしょう。

献身性という点で共通している。現場と幹部の一体感がある。幹部が体を張って組合員を守る。組合員も理窟抜きでついていく。そういう一体感が強いと思う。他の組合より強いと思う。

——組合員の組合に対する信頼感は強いということですね。そうすると委員長は組合運営についての悩みはどこにありますか。

あまり苦労していない。しかし幹部も年をとって昔のような活動力がない。若い人たちの血が必要だ。それが悩みといえれば悩んだ。全国統一闘争をくんでも結集力は強いと思う。

——一般にはシラケ・無関心・中産化といわれるが、全日自労の組合員にはそんな余裕はないということですね。

そうだと思う。組合に結集しなければ何ごともなせないという三〇年間の経験が相当浸透している。団結力について今後も自信がもてると思う。政府は一九八五年に六五歳以上は排除する、いまやめれば一〇〇万円ぐらいの退職手当を出すという方針を出し、二万人追出しを狙った。私達も体力から

みて無理な人もいるから一万人ぐらいがやめても仕方ないと思っただが、結局一万五千人の退職で、政府の狙いはくずれている。組合員はよく頑張ったと思う。

危機は深まっている

——八〇年代労働運動路線についてお聞きしたい。今日の労働運動の現状をどう考えていますか。

労働運動の危機は深まっていると思う。それが象徴的にあらわれているのは春闘の連敗だ。労働組合はやはり要求獲得能力が問われる。程度の問題はあるが、基本的に資本や政府に譲歩を迫っていく力が問われる。大衆をどれだけ結集するか、相手を追ひこむ戦術もあるが、結局は指導部の要求獲得の執念だと思う。この執念がみられない。

もう一つは大衆の自発的な闘いに依拠していない。非常に幹部闘争的になっている。下はシラケてしまっている。この間隙をうめるものは何なのか。よく価値感の多様化とか、中産化とかで仕方がないというが、そうではない。幹部の体を張った指導があるのかが問題だ。私は大闘争のときに組合員

の前で、体を張るといって自分を断崖の淵におく。要求獲得のためにキリキリ舞いをしなければならなくなる。組合員は委員長だけ勝手にやれ、私達は知らない、ということにはならない。われわれも頑張るといふことになる。

職場の自発的なやる気を出させるためには徹底的な討論だと思ふ。この中で納得が生まれてくる。本音の討論がないと自発的な闘いは組織できない。正直いって私の組合でもむづかしい。どれだけ努力しても、努力のしすぎということはない。この中で幹部と大衆の一体感が生まれる。理窟はよくわからないが、幹部についていこうということになる。

五〇年代、六〇年代にはそういう労働運動があった。いまは形骸化しているのではないか。それが労働組合運動の原点だと思ふ。

——一方では政府・独占の攻撃・戦略の中にくみこまれていく傾向も拡大しているのではないではないか。

合理化に協力する労働運動が民間のなかに広がっている。この風潮が官公労にも伝染しているのではないか、高度成長期には彼らに

も一定の賃金をあげる政策があった。この中でビッグユニオンの労働使惑着が深まり、右よりのJCが形成され、春闘の主導権をとるようになった。しかし一九七三年に高度成長政策は破綻した。この時がポイントだったと思う。相手は賃金は上げない、減量徹底、生産性向上徹底の政策をとってきた。このときの総評の対応が高成長時代と同じ発想で春闘にとりくみ、闘いが次々に敗北していく、下からは労働組合に対する信頼が消えていく。総評の方針もぐらついでくる。

春闘がうまくいかないから政治だ。ということでも社公路線が出てきた。これがまた革新勢力を分断することになった。非常に政治主義的な、中道路線で政府をとって、労働者の要求を前進させるという発想だった。これが状況をますます悪化させたと思う。そこへ労働問題が提起されている。

カギにぎる官公労運動

——指導の問題についての批判と同時に、今日の労働運動の戦略的弱点である膨大な組織的空白地帯にどのように切りこんでいくの

かが、八〇年代の大きな課題だと思えますが。

建設などでは二重・三重の構造になっている。自動車産業でも本工より臨時労働者の方が多い。本工が臨時労働者を踏み台にしている。労働組合にはどうしてもエゴがあつて、わが企業、わが産業が安泰であればよいという気分がある。それで済んでいけばよい。しかし済まなくなっているのではないか。組合員を守るためにも未組織労働者の組織化を考えないと守れないという状況にきているのではないか。

——そういう活動を統一労組懇は非常に重視しているが、組織化の主体として眞評・地区労がある。その強化についてどう考えておられますか。

私も地区労の役員をしていたこともありますが、地区労は選挙になると夢中になる。もう一つは春闘、この二つが地区労の仕事になって

いる。地区労の中心は官公労のタテ系列で、地区労幹部は上をむいている。地区労は町づくり運動をやるべきだ。町には深刻な問題が一杯ある。町を支えてきた経済基盤がくずれつつあることや、高齢

者の不安は拡大し、小零細業者はスパーにやられている。国家の縮図だ。この町をどうするかを地区労は考えなければならぬ。ここに視点をすえたら地区労は強くなる。革新政党をまきこみ、革新統一戦はここから生れると思ふ。ここで共産党排除や社会党排除をやりあつてはだめだ。これが中心になれば公明党支持者だつて、自民党支持者の一部だつて引きつけられる。こういう運動をまだ本気になつてやっていない。これは高齢者政策一つとっても反自民・反独占の闘いにならざるをえない。政府・自民党の政策をかえさせる闘いにならざるをえないと思ふ。新しい革新自治体もこの中から生まれてくる。いままでの革新自治体は政党のくみ合せだけで生まれている。市民的な運動の結合の中で生きていないから、すぐに保守化してしまふ。

もう一つ重要なのは官公労の運動だ。これがカギをにぎっている。いまは官公労が方針を見失っている。春闘も民間準換、民間の下賄けだけやっているので官公労の地盤沈下はすすむ。官公労は親方

日の丸攻撃をうけてますます萎縮して行く。官公労運動の建て直しが緊急課題だと思う。栄光の指導権をとりもどさねばならない。

分裂主義者にはならない

最後に労戦統一問題についておうかがいします。これだけ長期に集中的に議論されたのは初めてだと思ふ。この論議の意味するものは何であつたのでしょうか。

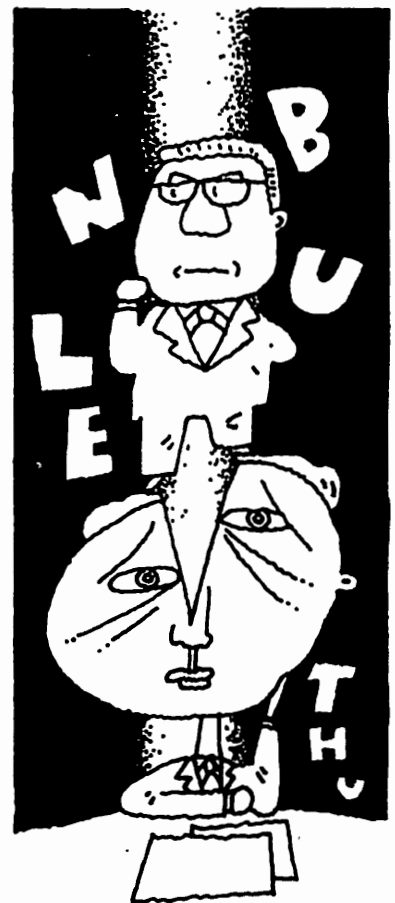
これからの労働運動路線をどうしていくのかという議論だった中心になつたのは「基本構想」だ。これには重要な問題が含まれている。「基本構想」をみて皆がびっくりした。ほつておいたら日本労働運動がどうなるのか、そういう危機感が活動家段階まで広がつていった。大論争だつたと思ふ。この論争を通じて日本労働運動の左派は健在であつたと評価されますか。

そうですね。しかし総評拡評の決定によつて総評は解体の方向に入ったといわざるをえない。その中で左派が自らを確立するかどうか問われている。統一推進会は総評の方針を承認し、最初五単産参加、ついで第二グループが

参加するのではないか。あとの第三グループも半分ぐらいは参加すると思ふ。残るのは統一労組懇といくつかの単産だけだろう。そうすると「基本構想」路線が中心にすえられるのではないか。これは労資協調、開かない路線であり、革新分断の政治路線だ。共産党排除の路線だ。この中で社会党左派と共産党が連合し、新しい革新戦線をつくつていくなら救いがあるが、革新分断がすすむと自民党や独占は喜ぶだろうね。憲法改悪に手がとどくような状況が生まれる。自由労連加盟も当然のコースだろう。

あれこれ考えると総評の官公労か運動の主導権をどうとりもどすかが大きい問題になる。いわゆる左流結集が形成されるのかどうかあるいは、どういうことになるかわからないが、新しい革新勢力が結集されるのか、という問題が出てくる。

総評の三〇年間がつくつてきた運動、社会党の運動が、全部右へ行くなんて考えられない。この中で闘う労働運動を守ろうとする勢力が必ずでてくると思ふ。この勢力と心から連合していけるように



していかねばならないと考えている。これで総評再建ができれば一番よいが、一二月七日の拡評によつて、素直な形の総評再建は、ちよつとむつかしいのではないか。私は総評再建を重視してきたが、事態の推移をみてみたい。

現に左流の頭在化が明らかとなつたのだから、これと手を握つていこうということにならないのでしょうか。

しかし官公労御三家も最終的に原案に同調し、統一労組懇を切つてしまふとなつたのではないか。この人達がOKを与えなかつたら拡評でも採決できなかったのではなからうか。統一労組懇との一致点を、もう少し辛棒強く追求してほしかった。辛棒にも限界があるということかもしれないが、あそこで断ち切られたのは非常に残念だ。も

つとねばり強くやりたかつた。宇佐美発言の撤回を求めた。それから態度をきめてもよかつたのではないか。少々準備会の発足がどうしても支障はないではないか。どうせセレモニーなのだから。

統一労組懇は今後、日本労働運動の強化のためにどういう役割りを果そうと考へておられるのか。総評の中で統一戦線づくりの影響力を拡大することが期待されていると思ふがどうでしょうか。

衝撃的行動はとらない。簡単に総評の中から抜けてしまふなんて考へていない。だけでも労働運動を立て直す役割りを真陰に追求したい。分裂主義者にだけは絶対になりたくない。むつかしい課題かもしれないが、この課題にあえて挑戦したいと考へている。